

岡山県における初期の教会形成

竹 中 正 夫

一 岡山研究の意図と資料

キリスト教が特定の地域社会に新らしく布教されるとき、わが国に於いては、いかなる方法が用いられ、そしてそこに形成された教会はいかなる形態をもっていたか、その会員の社会的な構成はどういう社会層から成っていたか、教会は一つの社会的集団として社会に対して如何なる関係交渉をもっていたか、こうした一連の質問は日本に於ける教会の社会的性格を分析するに於いて重要な課題である。本稿は主として岡山地方に於ける初期の教会の形成過程を分析し、初代に於ける日本の教会の社会的性格を究明しようとしたものである。こゝでとりあげる年代は岡山県の諸教会のごく初期のものであって大体はじめて岡山伝道のなされた明治八年から津山教会成立の明治二十三年に至る十五年間に限定されている。この期間に岡山地方における諸教会の形成過程を分析し、その社会的な性格を明らかにしようとするのが本論の意図である。従って、それ以後の年代に於て、これらの諸教会が種々の困難に遭遇し或るものは著しく衰退して行つたが、その歴史の変遷の過程や原因の分析は又他日に稿を改めて当りたいと思つている。

主として用いた資料は大体次の三つのものからなっている。

一、宣教師の報告

之には次の三つがある。

(1) 個々の宣教師のアメリカン・ボードに宛てた報告書、之はハーバード大学に保管されており、筆者が先年、訪米中初期の岡山関係のものを筆写したものである。

(2) アメリカン・ボードの年報 (The Annual Report of American Board of Commissioners for Foreign Missions)

(3) ミッションナリー・ヘルルド (The Missionary Herald) 之はアメリカン・ボードの働きを記した月刊紙で岡山に於ける伝道の状況も時を追うて記されている。

後者の二つは神戸女学院図書館の所蔵になるもので之らを用うる機会を与えて下さつた好意に感謝したいと思つう。

二、岡山の諸教会の歴史及び資料

明治十年代の教会の原資料の多くは散逸しており、特に大事な岡山教会は戦災により殆んど凡ての資料が焼失されたことは残念なことであつた。しかし津山教会、倉敷教会、笠岡教会、高梁教会等には原資料が保存されており、いくらがでもそれらを

通じ、又古老たちとの語らいの中に、初期の状況を探索することが出来た。貴重な資料を理解をもって提供して下さった諸教会にお礼を申し上げたいと思う。

三、その他の資料

七一雑報や岡山の諸教会の関係者の伝記や記録がある。特に記したいのは高梁教会に永く仕えられ、順正女子高等学校の校長として終生を北備の伝道に当られた伊吹岩五郎氏の「備北文化と基督教」がある。之は昭和二十二年に同氏が書かれたもので第一輯七十九頁、第二輯は七八頁から成っており、高梁を中心とするキリスト教の働きを知る上に非常に参考となるものである。

二 岡山伝道の端著

岡山地方にはじめてキリスト教が浸透する様になったのは、一方的な説教からではなく、身を低くして他者に仕えるという隣人に対する奉仕の業を媒介としている。

岡山を最初に訪れたプロテスタント教の宣教師はW・テイラー(Walace Taylor)である。彼は医師であり当時岡山県の衛生行政を担当していた中川横太郎の斡旋によってテイラーは明治八年四月岡山を訪問した。彼は約一週間岡山に滞在し医療に当ると共にキリスト教の話をなす機会を持った。テイラーは岡山を去るにあたって、二・三ヶ月に一度今後も岡山を訪ねる様に懇望され、その後彼は数回岡山を訪問している。その後長期の居住の許可がおりたが、それは六ヶ月の期間に限られており、しかも夫人や子供連を含まぬものであったので、やむなくテイラーは京都に移り医療伝道に従事した。

明治十年の春から夏にかけて宣教師達は岡山訪問にあたって当時

同志社の学生であった金森通倫、横山(二階堂)円造、小崎弘道等を伴って、主として中川の尽力により集會を市内の数ヶ所に於いてなした。

前記のアメリカン・ボードの岡山報告によると、「二八七七年(明治十年)アッキンソン氏は二人の日本の学生をつれて数日間岡山に滞在し数ヶ所で多くの聴衆に説教をなした。その中には米穀取引所が会場となったときもあった。我々の持つて行った書物の売り上げ量をみても人々の間に関心がいかに深いかを察せられ、若し夏期に京都の学生を派遣するならばその費用をこの人々は喜んで負担するのではないかということを保証するに充分であった。」

かくて明治十年の夏期休暇中同志社より神学生を派遣することになり、金森通倫が休暇になるや早々伝道に励んだが、途中彼は病のため森田久万人が之に代り、吉田作弥も来って之を助けた。

明治十一年春、アッキンソンはパロース、ダドレーの二女史と多聞教会員の山田良齋を伴って中国、四国の伝道旅行をなした。七一雑報に寄せた山田の報告によると

「五月一日岡山下の町福岡吉郎宅に着し、伝道に就ては中川・長田の両氏最も尽力す」とあり、

三日の夜は二百人余 二日は夜講席に聴衆百人余

四日は午後二時より中川の案内で岡山市を離れる一五・六町東北の竹田村と唱る新平民の村で集會をなし

五日は聴聞人二百七十人余

六日七日八日の三夜とも同様聴聞人多く

「徒らに外邦人の容体を見る斗の人は少なし」と伝えてゐる。

特に今回は女学校の生徒四十ばかりが女教師のところへ歌の稽古に来たり、婦人を対象とした集会をなし、彼らの教えた歌は人々に広まり、約二百冊の歌の本が売れたと記している。

同年夏、金森は再度夏期伝道に岡山に遣わされ、熱心に伝道に励んだ。その夏の終りに金森は次の様に岡山の教勢を伝えていた。

「中川氏宅にて毎朝八時より説教せしに初めの内はきゝくるもの一四・五人もあり此人達は昨年より既に神の道を信じて安息日をも守り、互に集まりをなし居たる信者なり。其後追々男女ともに加増して二五人に至りしが、此等の人も真心をまつて神に仕え且安息日を守ることを約したり。」

石路にまかれた種が三年の日月を経て漸く萌芽を出しつつある状況を我々は知るのである。これらの神学生達の夏期の伝道は一八七八年(明治十一年)一月二日及び三日に開かれた大阪における会議によって創立された日本基督教伝道会社によってなされたものである⁽¹⁾。この会議は当時アメリカン・ボードによって設立された京都、大阪、神戸、兵庫、三田の地にある九つの教会の代員十八名が集り、日本伝道についての最初の自主的な組織を結成したもので、新島襄、沢山保羅、今村謙吉の三名を委員に選出し、自治自給自立の精神に基づいて教会の形成を行わんとしたものである⁽²⁾。

(1) Wallace Taylor はオハイオ州に生れオハリン大学を卒業後、ミシガン大学で医学を修め一八七四年一月一日神戸にアメリカン・ボードの宣教師として到着、ヘリー夫妻と共に医療伝道に当たる。一八七六年から七八年まで京都に滞在し同志社の教師をつとめるかたわら医療に従事したが、病院伝道についての政府の支持

を得ることが出来ず、一八七九年宣教医アダムス博士の死にともない大阪に移り、長春病院を起し教会に奉仕した。この教会が後の島ノ内教会である。一九一二年六月二十三日、三十八年六ヶ月の長きにわたる日本に於ける医療伝道に終りを告げ帰国した。その間一年間に平均一万二千人から一万五千人に及ぶ患者を診察し、医学の研究にも熱心で「日本に於けるキトマス」という二論文があり一つは肺臓、もう一つは肝臓キトマスを扱ったものである。

(Fragments of Fifty Years, some light and shadows of the work of the Japan Mission of the American Board, 1869—1919, pp. 104—106)

(2) ハヤリーの岡山訪問とレポート「The Missionary Herald Oct. 1879, p. 389, 伊吹岩五郎「備北文化と基督教」第一輯・五頁。及び A Chapter of Mission History in Modern Japan; being a sketch for the period since 1869, and a report for the years since 1893 of the American Board Mission and the Kumai Churches in their Affiliated Work, compiled by James H. Petree, p. 43

(3) Fragments of Fifty Years, p. 104; 及び First Annual Report of Okayama Station, June 1879, ABCFM Japan Mission Vol. I p. 59. (今後これを First Okayama Report, 1879 と記す)

(4) First Okayama Report, 1879

(5) Rev. John L. Atkinson, イギリスに生れシカゴ大学を卒業し一八七三年に日本にアメリカン・ボードの宣教師として来り一九〇八年に至るまで主として神戸に滞在し宣教に励み、「Morning

Light”の編輯者でもあった。

- (6) 横山円造、小崎弘道
 - (7) First Okayama Report, 1879
 - (8) First Okayama Report, 1879 及び岡山教会小史二頁。
 - (9) Miss Martha J. Barrows, ヴェルモント州に生れイェウント・ハリヨウツ、カレッジを卒業し一八七六年に來朝し神戸女子院に奉職した。
 - (10) Miss Julia E. Dudley、イリノイ州に生れロックフォードカレッジに学び、一八七三年に來朝し一九〇一年まで神戸女学院に奉職した。
 - (11) 七一雜報 明治十一年六月七日号
 - (12) 同右
 - (13) 七一雜報明治十一年九月六日号
 - (14) 第一年に伝道会社に集められた金額は一二三円で之は神学生を夏期伝道に派遣する費用にあてられた。(Fragments of Fifty Years, p. 17)
 - (15) A Chapter of Mission History in Modern Japan 1869—1895, pp. 67—67, also, Fragments of Fifty Years pp. 21 ff.
- 伝道会社が設立せられた為に明治十一年夏休、左の人々が各地に派遣せられて伝道に従事した。
- | | |
|--------------|-------|
| 備中笠岡(西京第一教会) | 不破唯次郎 |
| 上州安中() | 市原盛宏 |
| 美濃() | 杉田勇次郎 |
| 予州今治() | 赤峰瀬一郎 |
| 予州岡山(西京第二教会) | 金森通倫 |

撰州高槻()	上原方立
丹州福知山()	山崎為徳
〃 亀岡(西京第三教会)	堀金太郎
江州彦根()	小崎弘道
右の他	
淡路	山田良介
岐阜	浮田和民

また山崎は岸和田、杉田は和歌山、上原は山城の八幡へも赴いたことになつてゐる。(七一雜報 明治十一年六月廿一日)

三 「ミッシヨン、ステーション」の設立

一八七七年から七八年にかけて宣教師の數も増加したので、彼らは九州・中國・四國方面に「ミッシヨン・ステーション」を設立しようと考えていた。そこで一八七八年(明治十一年)の秋、アッキンソンと宣教医バリーは候補地の選定の旅に出ようとしていた。彼らにとつて第一の候補地は九州の福岡であつた様である。ところが出發の前日、二人が神戸の町を歩いていると偶然にも赤い長靴が旅館の前にぬいであるのをみた。之が一つの契機となつて岡山ステーションの設立が進捗したことをケリーは次の様に記している。

「大事な歴史的な出来事はしばしば偶然的な要素を契機とするところがある。たとへば岡山ステーションも一足の赤い長靴に負うところが多く、それなくして岡山ステーションは恐らく設立もされなかつたであらう。この物語は長く記録しておく価値があると思つた。われわれの理解者中川は赤い長靴を愛用していた。アッキンソン

ンとベリトが岡山に、出立しようとしていた前日アッキンソンは神戸の或る旅館の前を通りすぎると偶然にも一足の赤長靴が玄關にぬいであるのを見た。たとえ之を北極でみたとしても誤りなく之は中川のものであると思つた。たずねてみると中川がその宿に投宿していた。その晩、彼と語りあううちに岡山にミツシヨ・ステーションをきづく計画を語り、ベリ博士が医療事業にあたる計画を話した。最初中川は計画に対してあまり関心を表わさなかつたが、次第に熱心となり京都に行く途中の彼の旅程を變更し直ちに、岡山に帰りアッキンソンとベリーの来訪の準備をするから数日出発を延期する様にと語るに至つた。かくしてこの赤い古長靴は主人の旅を中断し踵をかえさしめた。しかしそれなくして我々は岡山に足場をもつことは出来なかつたであらう。」³⁾

かくしてアッキンソンとベリーは一八七八年十一月十四日岡山に到着した。時の県令高崎五六は非常な熱心をもつて宣教師を迎え入れる為の支持を与えた。同じ年の十二月にはベリーはペティ、ケリーの両宣教師を伴つて再び岡山を訪問し、再び歓迎を受け、岡山における活動について具体的な相談をなした。ベリーは旅を了えミツシヨ・ステーションに岡山が最も有力であることを次の八つの点をあげて報告している。

「一、岡山県令をはじめ政府の役人達が非常に協力的であり、我々の計画に関心を示し我々に必要な自由を保証する意図がある。

二、池田藩侯によって建てられた学校(源泉学舎)に二人の宣教師を教師としておき、一日一時間宛教授をなすこと。

三、県の病院の運営にあつて私が提出した病院の経営の規則を守るという県当局の約束を得た。

四、私(ベリーの事)を県の医療衛生行政の顧問とし、私自身の病院、医学校、その他の近郊の都市における働きに対しては自由な立場を認めること。

五、市の東方に私共の住宅用の土地を提供すること、そして建築についての損害の保証又は岡山を移る際の建物の保証を得ることが出来た。

六、これらの計画が長期にわたるといふ理解のもとに少くとも五年の契約を結ぶことが我々にとって可能である。

七、倉敷、児島等近隣の町々を訪ねるに、今直ちに診療所を彼らの費用で開きたいという希望をもつて我々を招いている。」⁴⁾

当時岡山は人口約三万三千で一万一千戸の戸数をもち一日の旅路で達し得る地域を含めれば凡そ百万三百人の人口を対象とする岡山ステーション設立の構想がここにかがわれるのである。

岡山ステーション計画が進みつつあつたとき次年度(一八七九年度)の予算が大巾に減ぜられ、⁵⁾新しいステーションを築く為に経費を必要としていた宣教師達の失望は大きかつた。丁度その時ボストンより「Estimates Restored: New Station」という電報が来た。之はアメリカンボードがそれまでに受けた個人寄附で一番大きな寄附といわれているニューロンドンのアサ、オーティス遺産の献金があつた結果からなされたものである。⁶⁾

かくてアメリカン・ボードはベリーと共に、ペティ、ケリーとウィルソン女史を岡山ステーションに派遣することに決し、一八七九年一月二十日に向う五年間の契約を県当局と結んだ。⁷⁾

やがて一八七九年陽春四月になりペリー、ペティー、ケリーの三家族とウィルソン女史は、長い間の念願であった新任地へと向つた。ペリー伝によると彼らの旅路は新しい希望にみちていたことがうかがわれる。

「四月に入り彼等は希望に燃えて四日間の旅を南の岡山に向けて新らしい活動分野であり、新家庭である地に出発した。雀は彼らの心に起きているよろこびに反響する如くに路傍の藪からその美しい歌をうたい、この一行の乗っていた人力車は春の野——赤い蓮華や黄色の菜種の花咲く——を過ぎて岡山へと走つた。長い山道には野生のアザレア(つつじ)が花咲き、拉草花(ラワンデル)の綺麗な花の紫色の霞の如くたなびいてる中を走りつづけた。」
県令は宣教師達が住居の新築がなるまで自分の邸宅を提供した。

彼らは予定通り、ペリーは医療活動、ペティー、ケリー、ウィルソンは夫々教育活動に従事した。県令は又彼らがその住居でキリスト教の集會を開くことを許可し、宣教師に対する誤解や疑念を取り除くことに努めた。⁽⁹⁾

彼らの赴任後岡山ステーション最初の日曜礼拝が四月二十日に西田町の県令の邸宅で行われ、約八十名が出席した。間もなく最初の日曜学校が開かれ約三〇〇名の子供達が出席したが平均の出席は七三名であった。⁽¹⁰⁾

ここで考慮すべきことは、岡山の土地自体が当時キリスト教の受容に於いて比較的好意的であったことである。明治の初年県令、新庄厚信は進歩的の儒教者西毅一(号薇山)⁽¹¹⁾を起用して学務を担当せしめ、進んで西洋の新知識を吸収する様に努めていたことも影響したと思う。又次の県令高崎五六は進んで宣教師を招き県下の英才教育

をなさんとした。更らに山陽自由党としていち早くより国会開設の諸願書を提出した自由民権運動の気風も岡山には盛んであった事情も指摘されると思ふ。⁽¹²⁾

当時、キリスト教は、保守的な封建層と結びつくのではなく、近代化の傾向を強くしていた進歩的な人々と出あつたのである。岡山県の国会開設諸願運動の指導者として一四名の人々が挙げられているがその中の二人は熱心はキリスト者となっている。即ち高梁の教会の開拓に貢献して柴原宗助と津山教会の重鎮となつた立石岐がそれである。

立石も柴原も共に明治十二年には県會議員であつたが士族出身の県會議員ではなくむしろ豪農商出身であり、「民衆のなかで生活し、民衆とともに生産に従事して来た政治家として、旧来の身分制度に基づく優越意識をもつたインテリ士族の自由民権家に比し民衆とのつながりが直接的であればあるほどその発言は具體的となり、その行動はより積極的とならざるをえなかつたのである。」⁽¹³⁾

立石は明治十一年に中島衛等と作州地方の大庄屋の民権派によつて成る共之社をおこし又同年には私立養蚕伝習所や二宮製糸場をおこし地方の殖産興業の發展に努め、明治二十二年国会が開かれるや自由党第一回の国会議員となつた進歩的な豪農層の指導者であつた。

柴原⁽¹⁴⁾は明治十一年県會議員をつとめ酒屋を経営していたが、中川横太郎と親しく、彼を通じて基督教に接し、ペリー、ケリー、金森等の高梁伝道に幹旋の勞をとつた。キリスト教徒になつてからは酒屋を廃し文具屋を営む一方、順正女学校の創立(明治十四年)の際の後援者の一人となり私立高梁病院(明治十六年)の発起人の一人となり

地方の文化の振興の爲尽力している。政治的には他県會議員達と國會開設のため奔走すると共に、自由民権家達の中核的組織であった。而備作三国親睦会の幹事をつとめ、國會の開設に積極的な努力をなしている。彼は當時の状況をえがき、

「夫れ斯の如く國會猶未だ起らず、憲法未だ立たず、人民は何を以て其権利を保全し、其の幸福を進捗するの基礎を鞏固ならしむべきか、是れ吾人が常に急進を主義とし、國會開設を冀望する所
以なりき」と所信を述べている。

之らの福音を受容する側に存していた自由主義的な進歩的な要素とキリスト教の指導者達を結ぶ鼎の役割を果したのが中川横太郎であった。彼は岡山⁽¹⁸⁾の西郷といわれる代表的人物で、若いときより正義観にとみ、明治十年の西南の役には薩摩側に同情し、之を加勢せんと大阪に出掛けた。キリスト教に接したのは丁度そのとき神戸で道を歩いていると、その日は日曜であつてたまたま新島襄が説教しているのをきいた。説教の主題は「キリスト教の愛」であつた。新島はその日の説教は充分聴衆を動かしたと思つていなかつた。然るに反乱軍に投じようとしていた中川には大きな感化を与え、彼は再び岡山に帰ることを決心するに至つたといふことである。

中川はさきにも述べた様に、明治八年最初にティラーが岡山を訪ねたときから岡山にミッジョンステーションが出来るに至るまで宣教師や神学生の伝道に當つて與当局との斡旋をなし又、自らの家を彼らの宿舍や講演会場として提供し熱心な協力を示した。

彼は眼をわずらい読み書きに不自由な身であつたが性は頗る豪胆で義侠に富み、キリスト教の応援演説を岡山並びに近隣の町村で行うのみでなく、特殊部落の人々の解放のため一方ならぬ尽力をした

岡山地方の水平社運動の先覚者である。中川は一風変わったところありキリスト教に熱心な協力を惜しまず自らもその教えを人々に説いたが、洗礼は受けなかつた。

彼は「キリストは救世の大業を成就し玉いしも決して自己の救に至つて一回も顧念し玉いしを不知寧ろ十字架上に苦を味い玉ひしに非ずや。余不肖と雖も亦其範を学び決して自己の救如何を思はず……自己の救を全くせんとせば利己主義に陥る憂あるなり。余は地獄に行けども社会の救を全くするを得ば大いに満足する處なり。又余にして一度會員たらんか諸君は余を束縛して自由の運動をなさしめざらん。之れ余の憂うる處なり」と言つて教会の一員とはならなかつた。しかし彼は局外者に留まらずその夫人は岡山教会となり、自らは理解ある助力者として尽力したのである。

(1) 後に初期の岡山伝道に當つた Miss Julia Wilson は一八七七年 Rev. and Mrs. Ous Cary, & Rev. and Mrs. James H. Petee は一八七八年に夫々日本に到着している。ウイルソン女史はニューヨーク州の出身、岡山には一八七九年から一八〇年まで滞在した。ケリーはマサチューセツツ州の出身でアーモスト大学を卒業しアンドヴァー神学校に学んだ。岡山には一八七九年より八七年まで滞在、教育と伝道にあたり、後八九一、九二二年まで大阪で伝道し、九二年より京都に移り同志社の教授をつとめた。彼の日本の教会史 History of Christianity in Japan Vol. I and II, は今日でも古典的な資料として尊重されている。ペティーはニールハンブシャー州に生れ、ダートモスカレッジを卒業しアンドヴァー神学校に学び岡山には一八七九年から一九一六年まで三十七

年の長期にわたって滞在伝道に励んだ。(Fragments of Fifty Years, pp. 121—122)

- (2) Dr. John C. Berry, はメネイン州に一八四七年一月一六日生れシェフマンン医学校を卒業し一八七二年にアメリカン・ホー下の宣教師として来朝し一八七七年まで神戸を中心に医療に従事し、監獄の改良にも与つて力があつた。一八七九年に岡山に移り八四年まで五年間滞在し初期の岡山伝道に貢献す。一八八五年から九三年まで京都の同志社看護婦学校及び病院で医療伝道に従事した。彼の専門は眼科であつた。ヘリーの伝記については大久保利武「日本に於けるヘリー翁」(一九二九年)と A Pioneer Doctor in Old Japan, The Story of John C. Berry M. D. by Katherine Fisk Berry. 訳本は昭和二十四年二月に出づる。印刷でなくガリ版で二十部だけ刷られたものである。(Fragments of Fifty Years, p. 20)
- (3) First Okayama Report, 1879
- (4) The Missionary Herald, Vol. LXXV April 1879 No. VI p. 142
- (5) Fragments of Fifty Years, p. 21 マンモンの一般経費は一八七九年度八、七四七弗から四、一六〇弗に減せられた。
- (6) 同右
- (7) The Missionary Herald Vol. LXXV, April 1879, No. VI p. 142
- (8) Katherine Fisk Berry, A Pioneer Doctor in Old Japan 更井よし子訳
- (9) First Okayama Report, 1879 p. 10
- (10) A Pioneer Doctor in Old Japan, 更井よし子訳
- (11) First Okayama Report, 1879
- (12) 西薇山については小林久磨雄著「西薇山」昭和六年がある。
- (13) 岡山県における自由民権運動については内藤正中「山陽自由党の組織過程」『経済論叢』七八巻一頁「自由民権運動と豪農層」『経済論叢』七六巻一頁及び「国会開設請願運動の発展構造」『経済論叢』第八十巻一頁二頁三頁がある。
- (14) 立石家は有元家・植月家と並び称せられた作州三家の一である名門であつた。群雄割拠の戦国時代になつて作州では有元、新免、後藤、三浦、中村、大河原、福田、草刈といった武将が互に勢力を争つてゐた。その一つとして、二宮の美和山城がまえていたのが立石家であつた。赤松、山名、宇喜多といふとき勢力と力を争つて戦乱にあき帰農して平穩な生活に努めた。平和を愛して農を帰つたこの家から法然上人の生母が出たのも偶然ではない。明治六年の記録によると立石家は平作米一二六俵、小小作米四七〇俵計五九六俵(約二町歩)を経営、奉公人二人下女婢二人日雇三人をもつ大庄屋であつた。(内藤正中「自由民権運動と豪農層」『経済論叢』七六巻一頁三二頁参照) 岐は弘化四年五月十三日に備中浅口郡船穂村の小野市太夫と同広子の三男として生れ、立石正介氏の養嗣子となつたのである。彼の受洗は明治二十二年二月十三日岡山教会で宣教師ヘティーからなされてゐる。
- (15) 内藤正中「国会開設請願運動の発展構造」(『経済論叢』第八巻第二号二九頁)
- (16) 柴原宗助は渡月郡井原町滝本家の生れで高梁の柴原家に入家した。彼の家は酒屋を営んでいて中川横太郎の紹介でキリスト

者になり、明治十五年四月二十六日高梁教会設立の際受洗してゐる。

(17) 内藤正中「国会開設請願運動の發展構造」(「經濟論叢」八十卷第二号二七頁)。

柴原は明治十二年二月の県会議員に当選し明治十三年月半数改選で退職するまで一年九カ月在職した。(岡山県会史 第一編一七頁)。高梁では酒醸業していたがキリスト者となつてから之をやめ文開堂なる本屋兼雜貨商を営み又、順正女学校には創立当初より熱心な支持を与え、自ら習字を教え、明治十八年には同校校長をつとめてゐる。彼は後に明治十九年より京都に出て寺町の丸太町を上つたところに書店を開き学生達を集め、一種の親分氣質を發揮していたが、晩年は再び岡山県に帰り来り明治三十一年十月三十一日より三十七年十二月二十八日まで二期にわたつて井原町の町長(岡山県郡治誌上巻五八九頁)として同町の為に尽力し銅像が立つほどにその功績を慕われた。後上房郡の有漢村の村長をつとめ高梁に引返し永眠した。伊吹岩五郎「備北文化と基督教」第一輯 六一—六二頁

(18) 安部磯雄「社会主義者となるで」一四二頁

(19) Fragments of Fifty Years, p. 20.

(20) 中川は当時県の役人をしてゐた模様であり又運送業にも従事してゐた。中川の宅がキリスト教関係者の宿泊所となつてゐたことについては七一雜報明治十一年九月十三日号、明治十一年九月六日号及び明治十二年四月二五日号など参照。又、特殊部落の竹田村伝道について中川が尽力していることは七一雜報明治十一年六月七日号参照。中川が岡山県の水平社運動の先覚者であつたこ

とは岡山県史にくわしい、岡長平氏にきいた。又、中川は自由民衆運動に於いても積極的に参加しており、明治十一年九月の再興愛国社大会には小林樟雄、竹田正志と共に出席している。(『自由党史』第一冊二三二頁)。

尚一八七七年十月六日付のアメリカンボードによせた森田久万人の報告書によると中川について次の様に記されている。

“Mr. Nakagawa (his son is in the school) who received us was very much interested in Christianity and the Doshisha School. He had been third officer of this ken, but now he is the head of the Imperial Porters Society. He has the great influence over the government and the people. He made a society to send young man to the Doshisha School, with the money which the society raised. He sent three young men already.” H. K. Morita Oct. 6 1877.

(21) 湯浅与三「基督である自由を求めて」—日本組合基督教会史 一一二頁

四 教会の設立

一つの地域に福音の種がまかれ之が結実するまでには、さまざまの契機が相働しているものであり、一概にその中の特定の要素を決定の契機として支配的に取り上げることが困難である。岡山の伝道の場合も当時の岡山地方の政治的社会的情勢、キリスト教の受容にあつた好意的であつた指導者達の存在、理解ある協力者として幹旋奔走の勞に當つた人物、そしてそれらの人物達と遭はされた宣教の任に當つた者達との「出あい」等が考慮されねばならない。その

中には社会的要因と共に偶然とも思われる小さな出来事や遙か何千マイル距った海の彼方で行われた決定が新しい門戸を開くに与つて力があったことを知るのである。

明治十二年六月同志社を卒業した金森は岡山の伝道に当ることに
なり来任し、いよゝ伝道の態勢がととのつて行つた。彼らの活動の中心は医療と教育活動で之に続いて宣教の業がなされた。岡山に到着後約一年を顧みケリーは第二回岡山報告書に医療と宣教活動が緊密に行われたことを記している。

「この年、県の病院が診療した患者の総数は一四、九三〇で中、新しい患者が三二二九人いた。この外ベリーの自宅で診療したものが一、二四二、患者の宅への往診が七九五を数えた。又、ベリーは岡山市の衛生状態について報告をなした。医療活動がもたらしている諸利益の一つはそれを通して近隣の町村にキリスト教について殆んどあるいは全く関心をもつていないものが宣教師達を喜んで迎えキリストの福音に接する糸口となっている。」

岡山近郊の伝道は竹田村を除いては高梁、惣社、倉敷、河辺、西大寺、天城、下津井等殆んど医療活動が中心となつてキリスト教の伝道がなされている。中には自らは医療について関心をもっているもので、キリスト教の説教を助ける余裕をもつていないと両者を割然と区別するものもあつたし、洋医をおそれて漢法医に頼らんとするものも少くなかつた。然し進んだ洋医の技術とベリーの人徳に人々は打たれ、上下を通じてその信任の度を日増しに加え、「遂には県下の開業医が自宅に来た患者を誘つて翁の病院を訪れたり、或は自分の家業を放抛し、翁の下に助手として働かんことを願ひ出するなど、翁が病院にいる日も、自宅に脈をとる日も門前殆んど市をなす有様

であつた。」

教育活動はウイルソン女史が病を得て帰国した以外は予定通りベ
ティー、ケリーの両宣教師によつて続けられた。ケリーは源泉学舎
での教育について、次の様に報告している。

「現在私は英語の読書と会話の二クラスを担当している。第一日
目教師が来て学校を案内してくれた。……合図の半木がなり少年
達が集つて居る部屋に入って、私の助手である青年が新任の教師
として紹介してくれ、一同は起立して最敬礼をした。……現在の
学生の英語の力を知り、宿題を与えようと思つて教科書のこと
についてたずねると未だ教科書が届いていないということである。

しかしお互の紹介をしたのであるから一日の授業としては充分で
ある。急がば廻れ」とは、この国のならわしである。なんでも
ないように見えて大切なものに可成りの時間をを用ふことにヤン
キーは忍耐深くあることを学ぶべきである。」翌日我々は授業を
すすめることが出来た。……私は学校で時間をさいていることは
私共の宣教師活動の為に無駄であると思つていない。これらの教
育を受けつつある青年達と親しくなる機会をもつのみでなく、幸
いに目下用いている教科書は、ウイルソンのリーダーの巻三で聖
書の物語から成つて居る。それ故に創造主なる神を認めないこの
国に於て創造の物語を読むことから我々の授業をはじめることが
出来たのである。どういふ理由からこの本が教科書として用い
られる様になつたかはよく知らないが、兎に角この本が用いられ
ていることを私は喜んで居る。」

内外の状況はキリスト教を歓迎するか如くに見えた。宣教師達
は県令の好意により、岡山随一の景勝地である借楽園公園内に西洋

館三棟を建造することが許可され、彼等は活動の基礎を得た。

キリスト教の集會も医療、教育の活動と相まって活潑に行われた。金森は市内数カ所で説教會を開き、中川横太郎、長田時行、川越義雄及び宣教師達と協力して伝道に励み教勢は頗るさかんとした。ペリーは初期の岡山の状況をみて次の様な樂觀的観測をしている。

「何れにしても確かなことは、当地の基礎時代にあつてキリスト教は非常な速度で發展しつつあるということである。この世紀の終りまでに日本はキリスト教國になり、福音に接せざる幾百万のアジアの人々にキリストの福音の知識をもたらず働きをとるに至るであらう。」

こうした状況の下に岡山に教會を設けようとする氣運が一八七九年の秋ごろから強くなつて來ていた。しかし中には慎重論を唱えるものもあつた。その一人は中川横太郎で、彼はキリスト教の會合に來る者の中には西歐的文化にふれたいものや他の目的をもつものが多く、純粹の信仰を深くもつものがどれだけあるかをたしかめる為、今暫く教會の設立を延期すべきことを忠告した。

初期の伝道に於いて困難であつたのは、キリスト教が西洋文化と共に來つた為、或る者は好奇心から、或るものは後者を手段として自己の目的に達せんとする意圖から宣教師の下に來るものが少くなかつたことである。時恰も歐化主義の時代であり、キリスト教が時流のあげ潮に乗つていた時丈に之は却つて警戒すべきことであつた。キリスト教が偏狭な國家主義の虜となることなく、又は西歐的なキリスト教の模倣に終ることなく、真に揺かれた土壌に死する一粒の麦となる為には幾多のくるしみを同時代者の人々と分ち合ふなければならなかつた。

ケリーは教會設立を數カ月延ばすという中川の意見に賛成し次の様に記している。

「將來に対する私の見透しの一つは、キリスト教が一つの時代的な流行になりはしないかということである。そして多くの人々が福音の真理を把握することなしに私共と結ばれてゆくのではないかということである。若しこれが事實であるとすると、教會を純粹なものとして保つことはますます困難となつてゆくであらう。今洗礼を受けキリスト者となることを希望する者が多いことは事實である。誰が教會員となれるかという点については充分な注意が払われなくてはならないと私は感じる。教會の設立にあつて教會員となる人々を決定する責任は我々にある。そしてその後のことは設立された教會が責任をとるべきである。それ故に、私共は最初に洗礼を受ける者達の信仰について充分明確にしておきたいと思ふ。」

翌年一八八〇年(明治十三年)の一月ペティは岡山の教會設立の近いことを告げ次の様に報告している。

「今はこの地に於て種まきのときである。大きな收穫は將來に残されてゐるが、丁度日本の畠では麦の收穫と稲の植付がほとんど同時に行われる様に、私共がたねをまき植つけしてゐるときに、いくつかの初穂を刈り取ることは喜びである。……しかし当地にあつていくつかの失望と問題がある。それは人々が外來のものとしてキリスト教の福音とを區別しはじめたことである。大部分の人々は前者のみを欲している。しかし全体の活動は前に向つて進みつつある。」

かくして同年十月十二日に「岡山教會組織」に関する會議が神戸

教会の松山高吉を議長として開かれ教会設立を審議し之を認め、翌十三日に設立式が挙行された。当地に於ける最初の洗礼式が二十七名の者に新島襄によって司式され六名の転入者と合して三十三名を以て岡山基督教会が設立されたのである。

ついで教員えの勧告をアッキンソン氏が述べ、新島は牧師えの勧告を語り、横井時雄が諸教会を代表して歓迎の握手をなし、沢山保羅が初代牧師金森通偏の接手札の祈を捧げ、金森の祝辞を以て閉会した。

ここに長い間の労苦の後に岡山にはじめて教会が誕生した。七一雑報の記者が教会設立の模様を伝えた後に「⁽²⁾莫はくは基督の恩恵此の燈明台によりて数万の人を救たまわんことを」と記した様に、中国、九州地方の広い地域に於て「世の光」となるべき使命を負つていたのである。

(1) Second Annual Report of Okayama Station by Otis Cary May, 1880.

(2) Second Annual Report, Ibid.

(3) アメリカン・ボードによせた森田久万人の報告書による。

(4) 大久保利武「日本に於けるペリー翁」一七頁

(5) The Missionary Herald, September 1879, pp. 335—336.

(6) この三棟の洋館は岡山で最初の洋館で当時見学に来る人々が絶えなかつた。またこの洋館の建築を請負つた大工、菱川吉衛の記録によるとペリーの人格が高潔であつたかを知ることが出来る。それによると菱川が損得を越えて仕事をしたので対し約束の金を払つたのちにも之を忘れず久しく経つてからペリーが菱川を

訪ね記念品を彼に呈した。それは立派な横文字の本で、それと一緒にペリーが肉筆で書いた、翻訳書がついていた。菱川は「博士はこの書はあなたにきつと利益になりますと申されましたがこれは私の見た欧米に於ける建築工事に關した書物の最初のもので、以来この書が非常に参考になりました。」と記している。菱川吉衛「岡山最初の西洋館」「日本に於けるペリー翁」一七六頁

(7) The Missionary Herald, Jan. 1881 pp. 59—60

(8) The Missionary Herald, Vol. LXXVII p. 19.

(9) 同右

(10) The Missionary Herald, Vol. LXXVI April 1880 p. 141

(11) 設立式の詳しい模様については七一雑報明治十三年十月二十一日号及〃The Missionary Herald Vol. LXXVII Jan. 1881 p. 56 参照

(12) 七一雑報 明治十三年十月二十二日号

五 初期の教会の性格

設立された岡山教会を中心として内外の力を結集して宣教の業がなされ、岡山県下の各地に教会が漸次結成されるに至つた。すなわち高梁に於いては明治十二年秋から伝道が開始され十五年四月に教会が設立され、笠岡には長い間の伝道の実がみのり明治十七年三月に、そして天城には同年十一月に夫々教会の設立をみたのである。

更に落合には明治十四年の頃より高梁から伝道がなされ十五年にはケリーが宣教師としてはじめた伝道をなし、十九年六月に教会が設立された。明治十七年ごろより宣教師ペティーや落合教会牧師上代知新らによつて伝道されていた津山には明治三十二年五月に教会が

設立されるに至ったのである。

これらの諸教会は欧化主義の時代を背景とし又、異教社会にある初期の少数者としての緊張をもって教会の形成に又社会への活動に

励んでいった。これらの諸教会の形成過程について委しく述べる紙数を持たないが、今主なる経過を辿ってみると教勢は別表の様になる。

主要組合教会数勢

明治 17-20 年

教会名	年代		全国順位	明治十八年	全国順位	明治十九年	全国順位	明治二十年	全国順位
	創立年代	明治十七年							
神戸	明治七、四、一九	二三四	3	二五三	3	二九一	4	三五四	3
大阪	七、五、二四	一四八	6			二二六	7	二九八	4
同志社	九、二、三	一四六	5	一五八	7	二二九	6	二九四	5
多聞	十、十、二〇	一三〇	8	一五九	6	二二七	5	二二五	6
安中	十一、三、三〇	二七八	2	三二八	2	三六四	2	二二五	6
今治	十二、九、二一	三六〇	1	三六〇	1	三七九	1	三七四	2
岡山	十三、十、一三	一五二	4	一九八	4	三三九	3	四五五	1
高梁	十四、四、二六	一三五	7	一七三	5	一四九	10	一七六	21

右の表は組合教会一覽表からとった、但し明治十八年は基督教新聞第一四三号の附録、日本全国基督教教会表からとった。

之によると、各教会は明治二十一年ごろまでは順調な進展をなし、その後、漸次衰退の途を辿っている。岡山教会を例にとると、明治十三年の創立当初十三名であった会員が、五年を経ずして十七年には一五二名となり、全国の二十八の組合教会中、今治、神戸、安中につぐ第四位の大教会となっている。更らに明治二十年には四五五名の会員を擁して会員数では全国四十二の組合教会中第一位を

占め、財政面でもその道常会経費は四六七円四一第五厘に上り、神戸・明石の教会に次いで第三位となっている。

これらの諸教会はその宗教的集団の内部の交りに於いて、いかなる人々から構成されてたか、そして彼らの生活に於いてはいかな倫理的な強調がなされていたか、又それらの教会は如何なる活動を社会に對してなして行ったか、等の岡山地方における初期の教会の性格について考えてみたいと思ふ。

一、教会の交り

新しい宗教的集團の創始期に於いては一つの革新的な情熱とこの世に対する一種の緊張感がみなぎっていることが多い。既成の宗教的集團の因習や封建的な人間關係に飽き足らずして新しい交り求めて宗教的集團が構成される場合が少くない。岡山県の初期のプロテスタント教会の中にそうした宗教的集團の創始期にみられる性格が多分に存していた。

(1) 交りの構成

初期の教会を構成した人々の中には各種の階層の人々が含まれていた。岡山教会の設立後まもなく宣教師ペティーは教会を構成した人々について次の様に伝えている。

「三十二名の会員中、五名は転入会をなせるもので彼らの一人々々の宗教的な体験をえがくなら長い物語となると思われるものが少なくなかった。妻のみ信者となれるもの、夫のみ入信せるもの、そして少くとも三人は宗教的な仕事につくべく訓練をうけていたものたちが含まれていた。彼らはさまざまな階層を代表していた。士族出身で学問をしたもの、農夫、工芸人、そして召使い等が含まれていた。」

さまざまな階層から一応岡山教会が成っていた様に右の報告に於て考えられる。しかし、その構成員の中でどの階層のものがより多く含まれており、支配的であったかは、個々の教会の形成過程の事情によって可成り相違している。同じ旧藩主の城下町であった岡山、高梁、津山では異った性格をもっているし、同じ農村の教会でも天城と落合では異った階層が結びついていた様に思われる。

岡山教会は先述の如く、進んで西洋文明を取り入れんとした県令をはじめ県の指導者達の斡旋により、キリスト教は比較的教養のあ

る士族出身の者達と接触する機会が多かった。岡山のキリスト教受容に与って力あった中川横太郎はさきにも述べた様に自らはキリスト者とならなかつたがその妻中川ゆきは岡山教会設立の日に受洗しているし、士族の出身である丸毛真応、吉岡正矩、福家篤男、岸本もと、大西ひで、大西きぬ、木全かよ等の如く士族及びその家族にあたる者達が大部分を占めていた。その後暫くして明治二十年岡山教会に赴任した安部磯雄は当時の岡山教会の模様を次のように記している。

「岡山市は云うまでもなく、岡山県全体に基督教が比較的早く傳播したのは全く教育が普及していたためではないかと思う。……其当時教会の代表的人物は何れも其年令に於て、其経験に於て私よりも優っていた。……男子では前に述べた石黒涵一郎と中山寛が弁護士であり、吉岡正矩、丸毛真応、福家篤男というが如き老練の人々が最も多く教会のために尽力して居た。殊に婦人には傑出した人々が星の如に輝いて居た。長老ともいふべきは中川横太郎の夫人であったが、其に次ぐ者は中村静、炭谷小梅、加藤春、横山ハナ、大西絹の人々であった。」

そして、会員の多くがインテリ、中産階級に属するものであったことを次の様に述べている。

「教会員の大部分を占むるものは知識階級に属する俸給生活者や学生であった。其当時、岡山に於ては既に師範学校や中学校が設立されて居たのみでなく、岡山医科大学の前身である岡山医学学校も存在していた。後には基督教主義の女学校（現在の山陽高等女学校）も出来たのであるから、教会の諸集会には女生生の数が比較的多かった。商人及び職人で教会員となつた者は多少あつたけ

れども、現在の所謂自由労働者は絶無であつたように思う。」

士族の出身のインテリ層が中心となつた岡山に對しベリーの医療事業を通して伝道のなされた高梁では、医師が多く含まれ、又一、三の薬商も含まれている。高梁の場合岡山に於て中川横太郎がなした幹旋役は当時酒屋を営んでいた柴原宗介によつてなされ、時計屋であつた林善助、鉄工商を営んでいた、石川豊次郎や地主の家に育ち県會議員を務め銀行重役となつた、柳井重宣や材木商の家本平左衛門などが初期の教会に参加していたが、會員の中には医者、薬剤師、獣医及びその家族の占める割合が非常に多かつた。即ち教会の柱石となつた赤木蘇平は内科を営んでいたがキリスト者となつたが故に患者からホイコトされ、妻いしは教会の献金に窮して自分の衣物を質にもつて行き責任を果し、却つて周囲の人々を励まして伝道に励んだ。留岡幸助はそのころ肺チトマスを患つて赤木に世話になつており、彼のすすめからベリーに接し、又キリスト教に触れる様になつたのである。赤木と共にベリーに西洋医学を学んだ後藤英江、彌屋終平はいづれも内科医であり、高梁教会創立者に名を連らねており、その外、有漢の医師神崎秀甫や順正の校医を勤めた山田忠治、内科の児玉頼平などがあつた。小林尚一郎、荒木善は菓種業を営んでおり、中島直治郎は養蚕業を営むと共に獣医をつとめていた。この様に高梁では地方の商人の外に進歩的な医師や菓種業者達が教會員の中に多く含まれていたことが指摘される。

笠岡教会初期の會員の構成をみるに主として小規模の商人や工匠人が多かつた。初期の受洗者である江浪喜平は煙草の製造をなし、専売になつてから建具屋に転じている。柚木吉郎は陶器商、西岡直吉は毛糸業、辻金三郎は鳥獸の標本屋、内田龜三郎は衣類行商、小

川奈太郎は麦稗真田のブローカー、秋田龜太郎は製本屋、小橋逢市が指物師、小野清次郎は米屋、大島綱治は表具師等と殆んどすべてが小規模の商業に従事するもので、多少大きな企業に従事しているものに、山陽製糸の重役で、町會議員をつとめた浅野富治、井笠鉄造の創立者であり、社長であつたその息子浅野理三郎が例外として見出される程度である。

初期の天城教会は大體三つの要素から成つていた。一つは津田歌子、山脇恒、石川真砂、垣見敬男等の没落過程の士族出身者と、朽木忠次郎、朽木兼三、板谷弥兵等を代表とする農家出身のもの、高橋常太郎や倉敷の林源十郎、大原孫三郎、木村和吉、浅野儀八等に見られる商人達である。明治二十年代後半から經濟的變動に伴いそれらの士族の多くは經濟的安定を著しく失ひ又、農民層も明治二十三年頃より訪れた不況によつて深刻な打撃を受け、新らしく芽生えつつあつた近代化の芽は封建的な農村の土壤に充分根をおろす暇もなく、時代の流れに押しやられて了つたのである。特に商工業の中心となつて行つた倉敷に明治三十九年教会が生れてからは主力となる信徒層を失ひ、国家主義的態勢のますます強化されてゆく農村の地盤にあつて、伝道を積極的に展開してゆくことはおろか、現状を維持してゆくことさえもが非常に困難となるに至つたのである。

落合、久世、勝山の地方の初期の構成員の多くは、零細な商業に従事する者が多かつた様である。勿論堀俊造(醫師)小松鉄一郎(豪農)等の如き有力な指導的人物もいたが、多くは知識階級ではなく小さな商業に従事する人々が多かつた。

初期の久世教会を懐古した小林鉄一郎氏の書簡によると

「昔も今も変りなく神の此の世の智者字者を用ゐる玉はず無きが如き塵埃の人物を活用し玉ふべきの御思籠着々流露実¹⁶に感謝感激の至に候

回顧すれば、久世教会にも初より大した人物も起らず、私共如き平々凡々取るに足らざるものをして玉はず、櫻野弥三郎（その日ぐらしのぼろ買）・国米松平、平岩作太郎、西町布屋老人、重願寺小路（裏長屋）のかもじやの老人（安井というひとりもの老人）・田下のふじよしの老母（高梁の伊吹家のところで女中をしていた）・零落の錢屋柴田青年、難波青年（木賃宿に居住）の如き、此の世にすてられし老若塵埃の如き人物をひらいあげて信仰に導き入れ給う恩寵を回顧し感謝の至りに候¹⁶」

之によると久世の教会は変手古な人々の集りであるという印象をさえ与えたくらい、貧しい人々の集りであった。

(2) 交りの性格

岡山地方の初期の教会を構成した人々には各層の人々が含まれていたが、その支配的な階層権威は夫々の教会の形式過程の事情にしたがつて異っていた。しかし初期の教会には新しい宗教的集団としていくつかの共通な要素が存在していた。

第一に挙げられることはこれらの人々は互に夫々ことなつた階層から出て来たにせよ社会的変転期にあって旧来の生き方に満足することが出来ず、新しいものを求めていた。彼らの中には消極的には既存の制度に不満をもつたもの、積極的には革新を期待する進歩的な人々が少なくなかった。勿論、中には、先述の如くキリスト教と西洋の技術文明を混同し、後者を得んが為めに、前者を利用してんとする者も多くあつたし、キリスト教、とくに、それを伝える宣

教師達に物珍らしさを覚えて接近して行つた者もあつた¹⁶。しかし、周囲の迫害や反対を押し切つて、なお洗礼を受け新らしい宗教的集団の内的な構成員となる為には単なる好奇心や巧利心以上のものが要請されていた。

岡山にキリスト教がはじめて来たときその橋わたしの役割りをした中川横太郎が進歩的な人物であつたことや地方に於て之を迎えた柴原宗介や立石岐が夫々自由民権運動の指導者であつたことは先にも述べた。その他の自由民権運動の指導者とキリスト教の接触を挙げると明治十三年十月家族を同伴して倉敷に伝道した川越義雄の報告によると、倉敷について、

「移住の後知己石坂翁の紹介により朋友も出来、十一月十四日の安息日戸長木村氏宅にて講義を始め、爾後引続き福音を伝ふるに聴衆三四十名あり、尤も男子のみにて中等以上の人なり」と記している。ここに言う「石坂翁」とは藩医をしていた石坂堅壮のことであり、彼は岡山県の自由民権運動の先駆者の一人で柴原、立石、林（醇平）等の県会議員等とはかつて国会開設請願運動をなした十四名の指導者の中に名を連らねており、明治十二年には自由民権家達の横の組織体であつた「兩備作三國親睦会」の幹事長をつとめていた。元來倉敷は幕府の天領であつた關係上、大政奉還にあつていち早く変革が行われ幕末の進歩的儒者森田節齋が在つて弟子達を訓育していた。その影響を受けて石坂を社主とし、浅口郡西原村の庄屋忍峽稜威が編集し、倉敷の葉間屋林醇平を発売元として「好事雜報」を明治十一年七月より発刊し、「愛國の情を好事に寓する」とし、よもやまの新しい事柄を報道していた²⁰。之らの民権家達と親しい間柄にあり、好事雜報にも寄稿し倉敷で醸造業を営んでいた木

村和吉や老松の農夫板谷弥平は倉敷における最初のキリスト者の群の中核となった人々であり、当初は木村の家で集會がもたれていた。⁽²²⁾尚石阪の子女はキリスト者となつて倉敷教会に連らなつてゐる。⁽²³⁾倉敷教会の記録によると「木村氏宅の説教會に集つた者は先ず知識階級の人々で、所謂話聞きの部に属する人が多かつた。」ことが記されておゝり、新しいものを求めつつあつた人々の姿を反映している。

明治十四年の西大寺の伝道に於いては自衛社に属する民権運動家達のはじめは反対をなすが後にキリスト教の説くところを理解する様になつたことが記されており、岡山では一部の民権論者が宣教師に好意的であつた高崎五六の政策に反対したことがあつたが、柴原宗介が間に入り、キリスト教に対する誤解をなくするよう尽力している。⁽²⁶⁾

第二に指摘されることは初期の教会に於ては交りが緊密であつたことである。彼等は成る程ちがつた階層から一つの新しい精神を求めてキリスト教に來つたが、過去の封建的な区別や現在の社会的な差別を越えて、キリストに於いて「これ皆一つ」であることを発見したのである。近代日本の黎明期に於いて人々の探索して止まなかつたもの一つは、在来の伝統的な權威や上下の封建的な從屬關係から自由になされた新しい人間同志の關係を支える精神的な基盤であつた。我々は初期の教会の中に一種の平民主義とも言うべき人々の新しい交りを見出すのである。

今日キリスト教はインテリリのもとして庶民的な平易さを失つてゐる感があるが、明治の初期に於いてキリスト者達は出来る丈市井の一般の人々を対象として勵まかける様に努力していた。当時岡山でも広く讀まれていた七一雜報の創刊号の論説欄には次の如き發行

者の意圖が述べられてゐる。

「日本國中男も女も平均たら其中で新聞紙やお布告書などを差支なく読通例の字読が何程ありましようか七分三といいたいが少し六ヶ敷ございませう……夫故此新聞紙には投書の外成る文解りよく平たい語で先生方の高説やら世の人の為になることをかき、いろは四十八文字さへ知ていれば後は読手の考がへて解るようにな致します趣向故何裏の七兵衛さんでも隣町の八兵衛さんでもお松さんでもさ竹さんでも亦僻ひの百姓衆でも此新聞しをよんで開化の仲間入をなさる様にお頼申します。」⁽²⁵⁾

とあるのをみていかに当時の教会の指導者たちが一般の人々の間に福音を伝えようと努力していたかがうかがわれるのである。

留岡幸助は明治十二年ごろはじめてキリスト教の集會に出たときは西洋の軍談講釈をききにゆくつもりで友人に誘われ出掛けて行つた。ところがきいてゐる中に、キリスト教の新しい人間理解に触れた。

「士族の魂も、町人の魂も、赤裸々になつて神様の前に出る時は同じ値打のものである、と申されたことが私の心を捉えました。」と留岡は述懐している。町人の家に育ち幼児より士族の子供達にいじめられ、商人と士族の間にある階層的差別をなげき子供心に士族をうらんでゐた留岡にとつてはキリスト教はおどろくべきものであつた。⁽²⁷⁾

初期の岡山の教会における平民主義を示す代表的なケースは竹田村の伝道である。ここは岡山市の西北約一キロほどのところにあつた特殊部落で水平社運動に関心をもつていた中川横太郎の斡旋によ

り早くから伝道がなされていた。明治十一年春岡山地方をアッキンソンと共に訪れた多聞教会の山田の伝えるところによると、

「四日(五月)は午後二時ごろより中川氏同道して当所を離るる事
一五、六町東北に竹田村と唱ふる新平民の村あり、此村に行しが、此地のありさまを見聞するに隣村に尋常平民の村ありて、互に両村の得失を図り且つは交誼を篤くせんと竹田村に会議所を設立せしに旧平民は聊さかの嫌悪の心なく新平民と集會して両村に關係する農の事柄を相談し互に村内の利益を論じ加之開化に着目し自由の理を述べ近頃中川氏社中の演説を此集會所に設くるという。今会場を見るに旧民は新民に謙遜して席をゆづる等其情義未だ他に例を聞かず、即ち感じて約翰伝一章二十三節を説明す。後席は教師の講義にて聴聞人の満面に感じたる様をあらわすに至る。凡て此村の男子の容儀を見るに実に従前穢多と唱ふる鄙態を蟬脱せるものと見へたり」³²⁾

と記されている。続いて岡山に夏期伝道に来た金森も竹田村に伝道し、水曜及び日曜の両日に集會が行われ、明治十二年には熱心な者が十二・三人に存在し中には定期的に岡山の集會に出席する者もあった。³¹⁾

つい数年前までは交りを殆んどもつことなく、相距つっていた人々が今は一つの宗教的集團のもとにわけへだてない交りをもっていたことは注目すべきことである。明治十二年の竹田村伝道の状況をみると、

「竹田村も相かわらず安息日の夜ごとには岡山より一、二の信者行て伝道することなるが是また追々盛んなり。去る十二日長田時行氏と竹田村の信者中塚栄一郎氏と共に岡山より三里程東北にあ

たる篠岡村に行て集りを開きしに始めに似合ず質問等之あるを見れば日ならず好果を結び盛んなるべし」と記されている。

明治十三年岡山教会の設立にあたって中塚とその妻は共に受洗入會している。³³⁾

明治二十年、二十三才の青年牧師として岡山教会に赴任した安部礎雄は当時の岡山教会の交りについて次の様に語っている。

「一方には特殊部落の中から教會員になった人があった。岡山の隣接地に竹田村という特殊部落があった。其処から中塚といふ一家族が卒先して岡山教會員となった。其の家には多少の資産があったのみでなく、主人は相當の教養があった。毎日曜の午前には教会堂で日曜学校が開かれ、幾組にも分れてバイブルの講義を聴くことになつて居た。教師は教會員中の元老が務めるのであつて、中塚も其一人であつた。其当時中塚は四十五六才位であつたと思ふが、彼の講義を聴く者は多く六十才以上の老人であつた。その中には旧藩時代の士族階級に属する者が一、二名あつた。私は赴任後、この光景を見て感激に堪えなかつた。基督教の精神が博愛主義であり、平等主義であり、平民主義であることは同志社時代に於て充分會得して居た。私が基督教に引き附けられたのも全くこの精神のためであつたと言ひ得る。然るに明治二十年の頃。昔の武士が特殊部落の人々からバイブルの講義を聴いているのを見た時、私はこれが即ち基督教の力だなどと感ぜざるを得なかつた」³⁴⁾

当時の教会が単に万人が神の前に平等であることを説くのみでなく、事実その交りの中に於いて、過去の封建的階層の線を越えた新しい人間の關係が存在していたことを知る事が出来るのである。

る。宗教が人種の階層の間にある偏見や差別を深くするに至った歴史的な事例もある一方、それらの原因を除去し、新しい交りを築くに至った生きた事実を初期の岡山の教会に見ることが出来ると思う。

(3) 交りの規律

何れの社会的集団にも、夫々の集団を律する規律が存在しているが、宗教的集団に於ては規律 (discipline) がその集団の性格を決定するに重要な要素となっている。

キリスト者となり教会に連らなることに於いて先づ強調されたことは安息日の厳守ということである。安息日は教会で朝、昼、晩と集会が開かれ、信者にとつても、牧師にとつても、「最も多忙なる日」であった。宣教師達は信徒の訓練に於いて聖日を守るということを重視した。興味あることは養蚕業に従事するものが安息日を、かいこの世話の為に守れないことをどう処理すべきかということが真剣に論ぜられている。

「人間の飼手達は蚕の赤坊を養うのに、忙しくせねばならなかつた。さて蚕が日曜日を通じて眠っていてくれればそれはありがたいことであつた。しかし、安息日の朝に目を覚ます懸念があつたらどう処理しよう。会衆は蚕の活動は天上の現象に属しているのであると決定した。それについて、あまり制限を加えることもなく、蚕を養うと言う事は冷徹なる必然の上にあつて、そのため働きを新約聖書の教えの例外となした」³⁸⁾

アメリカン・ボードに寄せられたケリーの手紙によると安息日を守る工場が教会設立の次の聖日から生れていることが記されている。「この町の大きな陶器工場の主人が工員の為の福祉になにか役立つと願っていた。工員達の中に十二・三才の見習工たちも含ま

れていた。彼は小さい学校を設けてこれらの少年達に学ぶ機会を与えた。主人は日曜を休日とするのは工員達の生活にとって有益であることをきき、それを試みることに決した。彼は私共のところに来り工場内の適当な場所の日曜日に宗教的な集りをなす為に助力を得ることが出来るかどうかたずねた。我々は勿論よろこんで賛成し彼の要請に応じた。

それ故に陶器製造の仕事は日曜日には止り、朝安息日学校があり引きつづいて説教というには至らないが短かい感話がなされる様になつた。……日曜日にも忙しく仕事をなすこの社会の只中であつて、工場の大きな門の傍に「本工場は本日休日なり」の掲示をみることは愉快なことである」³⁹⁾

七一雑報の伝えるところによると明治十三年末新島襄は岡山訪問に際し石の工場を訪れ講演をなしている。⁴⁰⁾

教会が成立して間もない当時であつたが、教会に居坐つて労働者を迎へようとするのでなく、こちらから工場に聖日出掛けて行つて共に集会をもつ様に努力していた様子がうかがわれる。同じ手紙によるとケリーは午後書籍や雑誌、絵画などを携えて工場を訪れ工員達と楽しむ三、四時間を過す様にし、この試みがよき実を結ぶ様に協力している。

安息日を守るということは、彼等にとっては社会の生活から引きこもるということの意味したのではなく、むしろ社会に於ける活動をより一層活潑にする為であつた。当時のキリスト者は

「夫人間たるものは誰にも皆心才即ち想像力慮り極る力等を働かす者なれば、七日毎に一日の休日あることは実に人間の利益なり。」と論じ安息日を守ることは人間の知性の働きに於いても、社会にお

ける人々の道義性の上からも有益なことであると主張している。安息日を真に神の前に新しくされる人間の再創造の日として守るという豊かさにみちた精神が、異教社会の抵抗の中に次第に「聖日厳守」といういかめしい戒律に移行し、或るいは、週日になされる社会に於ける戦に必要な新しい力を与えるよりもむしろ、それから信者を遠ざけるもの、教会内部の働きに全身の精力を使い果す多忙なる日として守られるに至ったことは後の岡山の教会の問題として取り上げられるべきである。

わが国の初期に受容されたキリスト教は、それをもたらしした宣教師達の背景から理解される様にピューリタニズムの影響を多分にもっていた。初期の岡山県のキリスト者の交りの中にも、ピューリタニズムの倫理を反映するものが少くなかった。さきの安息日を守る精神もその一つであり、具体的日常の生活に於いて、禁酒禁煙を実行し、一夫一婦制を主張し、節制を重んじ、勤勉に働き、献財を励行する様に努めていた。マックス・ウェーバーの言う「内世俗的禁欲」的態度に通ずるものをわれわれはそこにとめることが出来る。当時封建的な倫理に問題を感じていた人々は新しい時代に於ける生き方を探索しておりキリスト教との触発に新しい人間の生き方を見出した者が少くなかったのである。

初期の岡山県におけるキリスト者の入信の記録の中には禁酒が直接のきっかけとなってキリスト教に接近する様になった者が少くない。

高粱の最初の信徒の一人であり、自由民権運動の指導者、柴原宗介は酒醸業を営み、自らも大酒家であったが、キリスト教に触れて之をやめ、酒樽を開いて高粱川に流し、酒屋を廃して文開堂という

本屋兼文具店を開くに至っている⁽⁴³⁾。同じ自由民権運動の指導者であった津山の立石岐も青年時代より酒豪で酒の爲めに屢々失敗し自ら之を悩んでいたが、岡山の信徒河本正五郎と接し、その熱心なすめに深く感じ、安息日学校で安部磯雄の指導を受け入信に至っている⁽⁴⁴⁾。

落合地方の最初の信徒である堀俊造の入信の経過も禁酒に負うところが少なくない。彼は医師の息子として生れ神戸に医学を学び、明治十六年落合に帰り開業していた。彼の親戚に堀友五郎という男があり、之が大酒家で堀も酒杯の友となっていた。或時友五郎が病に罹り堀が之を診察し、酒をやめることをすすめた。友五郎は、堀もやめるなら自分も禁酒すると言うので、禁酒の方法を考えてみた。神戸に遊学中「キリスト教によるなら禁酒がなされる」ということを聞いたので、早速高粱に赴き、二宮邦治郎を招き堀一家を中心にキリスト教の話をきき、酒をたち入信するに至った。

当時の七一雑報には屢々禁酒に関する記事が載っており同じ問題に悩む人々に啓蒙を与えていた⁽⁴⁵⁾。笠岡在住の柚木七郎は七一雑報に横浜禁酒会の規則書のあるのを見て、之に励まされ、同志の者と相談して明治十年十一月より右の規則によって禁酒会を設立した。設立当初は会員八名でその中には笠岡では有名であった窪田次郎という医者も含まれていた。彼等は毎月六日を定例日として柚木宅で会合を開き、修心、衛生、経済等に関したる講演をきき約二十名許りの者が集っていた。尚会員は五錢を会費として出費していた⁽⁴⁶⁾。

教会が結成される以前にいち早く禁酒会が設立し、そこを中心にキリスト教の伝道がなされて行った例をここにみる事が出来る⁽⁴⁷⁾。

岡山に於いては中山寛や河本乙五郎等により明治十九年より禁酒運動がおこり、明治二十年三月中山寛を發起人として禁酒会が設立され、その後中断されたが、再興され、大正十二年遂に禁酒会館を岡山市山下十八番地に設立している。

飲酒に身をやつし、英雄色を好むといった奔放な生き方をする者が多かった封建社会から近代社会への過渡期に當って心ある人々は自律的な人間を形成する精神的よりどころを求めていた。之にこたうるものとしてキリスト教が彼らに新しい生き方を示し彼らは周囲の人々が驚くほどうつつかかわつた人間となつて行つたのである。しかし初代の人々があつていた問題とは異つた問題をもつ時代の變遷の中にあつて後のキリスト者の間には、なお禁酒禁煙が即ちキリスト教であるかの様に考えられ、福音に従ふことと禁酒という行為が同一視され、神に対する自由な応答としての禁酒が考えられるのでなく、恰も信仰に代る行為として、或いはキリスト者として従ふべき戒律として拘束する様になつて行つたことは後の教会の直面した課題であつた。

禁酒に次いで重要な問題となつたのは男女の倫理であつた。キリスト教は一夫一婦制を説き、女性の解放を主張した。この点に於いて最も代表的な出来事は炭谷小梅の入信である。彼女は中川横太郎の妾であつたが、金森通倫や宣教師達によりキリストに接し、之を学び、自己の立場に深刻な煩悶を抱くに至り遂に中川と別れ、キリストに従ふことを決意した。中川は容易に之を許さず愛子トヨを断じて小梅に与えない旨を告げた。

「之れを聞きし彼女は身も魂も消え入るばかり泣きぬ。ああ神に従うには斯くも苦き杯を飲み尽さざる可らざるかと。されど彼女

は主の十字架を思い、決然として愛嬢を中川氏の許に送りかへしぬ。……斯ていよいよ明治十三年十月十三日岡山教会創立式の當日、その漆黒の頭に聖水をうけて主の名に入れられたり。」

苦惱の中にあつた小梅を陰に陽に援け導いたのは、当時岡山に滞在していたタルカッタ女史であつた。女史は女子の解放とその地位の向上に積極的な働きをした人で、或る時板垣退助に面会し「貴方は自由民権の主唱者なるに夫人の権能を侵害せらるるは不都合なり」と言つて板垣の蓄妾を攻撃したことがあつた。小梅は石井十次の精神的母として之をたすけ山陽女学校を後援し、自ら岡山教会の婦人伝道師となり、教会の發展の為に尽力した。又明治当時岡山の女子解放運動の指導者であつた影山英子などと共に婦人の地位の向上の為に尽力している。

又当時の教会では会員は信者の者と結婚する規則があつた。天城教会は明治二十二年臨時總會を開いて、「結婚は信徒間たるべきこと、若し止むを得ざる場合は、牧師に相談すべきものとす」という規則を設けている。倉敷教会の中心的信徒であつた林源十郎(先代)は明治二十二年山川均の姉山川浦子と結婚したが信者でない者と結婚したというので謹慎を命ぜられていた。林は安息日に教会に出席することを禁ぜられ大変辛らかつたと伝えていた。同様の例を初期の津山の教会の交りの中に見出すことが出来る。即ち明治二十四年六月七日の教会記録によると、

「會員三好志麻儀辻明輪と本教会へ無沙汰結婚の風聞アルニ依り臨時總會ヲ開ク。出席人員拾式人の内拾人勧告ヲ可トスルモノアルニ依り多数決ヲ以テ結婚不適当ノ勧告ニ議決ス」
右の勧告を伝える為に三宅トトリと野呂ヨシが勧告委員に挙げられ

三好志麻に伝えたが彼女は之を受けなかった。そこで臨時総会が開かれ彼女を処罰することが議されている。

「出席会員拾六人ノ内、二人ハ処罰セストノ異論アルモ拾四人ハ処罰セン事ヲ望ム仍テ本会規則第十章戒規ニ処罰スル事ニ議決ス因テ其処置ノ方法ヲ謀ル拾六人ノ内一人ハ勸戒、一人ハ晚餐ノ陪筵ノ禁止残ル拾三人ノ除名説ノ多数ニ議決ス」

とある。しかし会員中右の臨時総会の通知漏れが有り其手続無効をとなうるものあり、又処罰があまりに過酷であるという考えもあり、次週の聖日に再度臨時総会を開いている。それによると

「因テ本会規則第八章第四項ノ違犯タルヲ認メ該条項ニ依リ処罰セン事ヲ望ムモノ出席会員二十一人ノ内、一二ノ異論アルモ多数議決ニ依リ本会規則第十章戒規第二号ニ因リ二回ノ晚餐礼ノ陪筵スル事ヲ禁止スル事ニ総議決ス」

とあり右の辻志磨は無届けで未婚者と結婚したことにより二回の陪餐停止となっている。二週間おいて、同じ様な未婚者との結婚のケースが届けられ臨時総会を開き今度は之を諒承している。翌年一月の教会会議では「会員たる者は未婚者と婚姻する事を得ず云々」という教会規則第四項を削除するか否かが問題となり一大事となり、「遽に削除せずして一カ年見合す事にし、当分の内、結婚の許否は役員に托し役員は予め許否を議決し惣会員に報告する事」と定めている。

この様に初期の教会の交りの中には宣教師のもたらしたピューリタニズムの影響を受け此の世から一線を劃して安息日を守り禁酒を努め、基督者同志の家庭を築き、この世の悪と対決するといった「分派の性格」が強かった。異教社会に於ける抵抗が強ければ強い

ほど、この世との対立的な姿は激しくなり、脱落してゆくものも少くなかったし、根本的にはその信仰の把握がなされる前に外見的な倫理が先行し儒教的な倫理と結びついて一つの誠命的な拘束を交りの中に与えて行ったことは否めない。笠岡教会の初期の僅か二年半の間に七十七名の受洗者があったが、その中十八名(23%)が除名となっているのをみても、如何に初代の教会の規律が厳格であったかを察することが出来ると思う。

二 教会の奉仕

岡山の教会はその設立の当初から内に緊密な交りをもっていたのみでなく、それは同時に外に向かって開かれた新しい共同体であった。その設立の当初から社会に対する働きかけが教会の活動の中に重要な位置を占めていた。

種を播く方の側から岡山の伝道はベリーの宣教医として医療を中心に行われたケリーのアメリカン・ボードに寄せた年報に明らか様に、竹田村を唯一の例外とするなら、他のすべての近隣の町村への伝道は医療活動を中心になされたものである。

明治十二年にミッシン・ステーションが出来て後総社、下津井、高梁、西大寺への伝道が開始された。これらの場合、中川横太郎が案内役となりベリー、金森を伴って其らの地に赴き、先づ診療をなし、又その地方の医師達との会合をもち、祈して後、金森がキリスト教について講演をするといった順序がたてられた。今一八八〇年(明治十二年)五月のケリーの報告からそれらの地方における活動を拾ってみると、

「総社―岡山西北西約一〇マイルの戸数約八〇〇から成る村である。

中川、金森と共にベリーは五回訪をなした。戸長は非常に友

好的で多く援助をしてくれた。これらの訪問の全費用はその地の医者仲間からまかなわれている。公立学校を借りて説教会がもたれているが、未だキリスト教に対する大きな関心が起きていたとは言えない状態にある。

患者数

一一三

集会への出席平均

五〇

医者仲間による一回の訪問に

対する出費

五円

河辺 岡山の西約十三マイルにある小村、戸数約六、七百。一八七九年十二月三日ベリーが最初の訪問をなす。村の役人をはじめ医師、弁護士、教師、商人、農夫の指導者などござってベリーを歓迎し「観光社」を結社し一二〇円の基金を作りベリー及びその助手達の訪問に必要な費用を負担している。ベリーは既に五回訪問した。

患者数

一五八

集会の平均出席

一〇〇

西大寺 岡山の東五マイルにある小村。数回の訪問がなされたが、未だ充分な成果が上っていないし、経済的負担もなされてはいない。

高梁 岡山の北西約二十七マイルの二千戸からなる城下町。中川の影響により、この町の指導的な商人(柴原宗助)がキリスト教に興味を示し一八七九年十二月四日ベリー、中川、金森招きを受けて高梁を訪問す。月例の訪問を輪旋する医者仲間会の会が出来、最初の公開の説教会には四五百人の聴衆あり、聖書を研究する集会在毎日曜先述の若い商人を指導者

としてもたれる様になった。……婦人の間に関心をもつものもあり、ケリー夫人が去る二月高梁に赴き二百余名の婦人達が集会に来る。

患者数

五一八

集会の平均出席

二〇〇

日曜集会平均出席

一六

医者仲間による

一回の訪問に対する出費 二六・一〇円

下津井 岡山の西南約一四マイル、一度の訪問がなされる。

この年にベリーが診療した患者数は五、九三四人に上っている。岡山に於いて、ベリーは県の衛生顧問として、下水の改善に、監獄の改良に、医学校に於ける教育に、病院に於ける診療に、寧日なき働きを続けた。当時民間に於いては未だ漢法が支配的であった為、西洋医学を厭う形勢があったにも拘らず、ベリーの人徳とすぐれた技術に続々と診察を求めに来る者が絶えなかつた。ベリーと共に岡山に診療に励んだ一医師の記録によると、

「氏の診療振りは、懇篤鄭重な上に、各医に対しても斬新な治療法を教授される為め、西洋医の祖先として深く尊敬、氏の宅診毎に、二三名の開業医が助手を勤め、その指導を受けるのが常であった。郡部出張は備中、倉敷、高梁、惣社外三四方所で、日本語に不熟練の為の、専ら実地治療の教導宣伝に勉められた。一例を挙げると、皮下注射の効験も知らぬ漢法医のみの時代であったので、注射の効力に驚き、神の来世ならんと尊敬するような有様であった。なお貧民患者に対する施療施薬の如きは、殆んど故拳に

違がなかつたのである。⁶⁸⁾

初期の教会がその成立の以前から直ぐ近隣にあって肉体的なくるしみを負う人々への奉仕の業をなして行ったことは興味深いことである。

こうした初期における岡山の教会に存していた奉仕者としての精神に啓発され日本の社会事業の中でも顕著な働きをなした人々を岡山県は輩出して行った。先述の留岡幸助はベリーの感化により監獄改良事業に励み、後に家庭学校を興し、青少年感化事業の開拓者としての足跡を残している。又岡山教会をめぐるキリスト者達に支えられて石井十次は明治二十年に岡山孤児院をはじめ、わが国に於ける孤児救済事業の先駆者となっている。徳富蘇峯が

「予が親しく交るキリスト者にて、身を社会事業に投したる者三、曰く、石井君十次。曰く留岡君幸助。曰く山室君軍平。」と記しているが日本の社会事業の先達として多くの人々の認める右の三人のキリスト者がいづれも岡山県に於いて育ぐくまれたことはまことに興味深いことである。

ベリーのあとをついでアダムスが明治二十四年に岡山に來り、花畑の貧民窟の子供達や病人に対する愛の業をはじめて行った。之が今日の岡山博愛会でありわが国における最初のセツルメントの種がまかれていたのである。⁶⁴⁾

三 教会の教育

初期の岡山県の教会の社会に対する働きかけとして医療活動と共に認められるのは教育の分野に於ける働きである。

ケリーの第一回岡山報告書(一八七九年七月)の終りに将来の計画という事項があり、一、教会及び講義所の設立、二、病院の設立をし

て第三に女子教育があげられ之について次の様に説明されている。

「最後のものは当地の人々自身の間から生れて來ているもので、女子の教育の為にキリスト教主義による学校を建てようという計画である。つい二、三週間前にはじめてこのことについての具体的な相談が六人の者達(内四人はキリスト者)の間でなされた。彼らは今後三年にわたって自ら一〇〇円宛拠金をすることを約した。この計画をきいて寄附を申し出る者もあり、徒らに計画を遅延することなく女学校を設立することを決した。⁶⁵⁾」

この報告書の書かれた日付は一八七九年の六月であるから岡山にミッジョン・ステーションが出来てから漸く二カ月を経たときであり正式に教会が設立される一年半ばかり前である。かれらは当時信者の数として二十名内外の小さいキリストの群に過ぎなかったが、この人々は自分達の会堂を建てることと共に同時に於て殆ど省みられなかった女子教育の機関を設置する為に相談をなしていた。そして注目すべき事は彼らはこの困難な仕事を自分達の犠牲に於て進んで當ろうとする熱意にみちていた。右に引用したケリーの報告書にも

「或る者はこのため(女学校の成立)、家屋を提供すると申し出た。……この仕事に當っている責任者達は、必要な金額は恐らくこの秋までには保証されるのではないかと思つている。彼等はアメリカン・ボードが二人の婦人の教師をこの学校に派遣する様に希望し、それ以上のはアメリカン・ボードの厄介にならず自分達で責任をもって当りたいとねがっている。学校の経営のため理事者達が教会から選ばれることになるであらう。⁶⁶⁾」

女子の教育に対して関心が薄いのみでなく、之に強く反対する者の少なかつた當時に於いて「女子教育せざるべからず」⁶⁷⁾の信念に立

って自分達の力を挙げて先づ之に當らうというのが創立者達のねがいであった。

かくして明治十九年七月十七日岡山教会に石黒齋一郎、小原俊治、中山寛、税所信篤、福家篤男、丸毛真応、大森馬之、大西縞子、小野田元、等が集い女学校設立を議し、遂に同年十月十八日岡山市東区中山下にあらずか三十名の学生たちと私立山陽英和学校を設立したのである。

この女学校の為にはじめにささげられた金は、日曜学校の子供達の献金であつて、それは僅か八錢の献けものであつた。

外国伝道会社から独立を保とうとした同校は度々経営難に直面した。明治二十四年には社会的状態の変動から同校も苦境に陥いつたが、教師生徒をはじめ内外の協力者が之を支え、苦境を脱し、明治二十五年九月山陽女学校と称して再発足することになった。この時に積極的な募金活動をしたのが立石つる子、中川横太郎等であり、当時の事情について上代淑氏は次の様に託している。

「財も十分でなく、女子教育反対の中についた山陽女学校はその後頻りに等しい大苦境に度々陥りました。中川氏はそれを救われ為に寄附金募集をして下さつたのでございます。毎日毎日草鞋ばきで、首には頭陀袋をかけ、岡山市は勿論、方々の郡部にまで行脚して下さいました。今日の様に交通の便のない時分とて、その御困難、御苦勞は並大抵でありませんでした。何のためにこんな御苦勞をなさいましたか、極あつた前の道を歩く人々からは、誠に余計なことをする人だ、自分の為にならない事に自分のお金を出したり、募金したり、つまらぬ事をする人だとの非難の声をえございましたが、物ともしせず唯一心に日本国に尽さんことのみに

願われ、女子教育させるべからず、との念願によって建てられた山陽女学校を生かさんものと奔走されたのでございます。」

こうして岡山での女子教育への関心は高梁に於いてもその初期のころから見られる。高梁の教会が設立された五月月前に既に順正女学校が小規模乍ら発足している。明治十三年二月新島襄が高梁に來り講演をした際、高梁女紅場といわれる小学校内にあつた裁縫所で演説され、その結果、婦人会がはじめて結成された。この集会の幹旋をしたのが福西志計子とその同僚木村静の二人であつた。彼女たち二人がキリスト教の信仰を受けいれ婦女女子の教育に励みつつあるのをみて、之を迫害する者がおこり遂に明治十四年七月女紅場の教師の職を辞し、キリスト教の同志たちの支援を受けて、同年十二月十日向町黒野氏宅を借り、私立裁縫所を開設した。集つた生徒は三十名に足らず、月謝も拾銭から式拾銭という僅少なものであつたが、明治十八年には文学科を設置し裁縫学校より女子の高等教育の機関としての形態を整えるに至つた。

女子教育についての初代の教会の努力は、岡山や高梁の様に比較的早くから開かれた都市のみでなく、勝山や津山という作州の山間地方に於いても小さいキリスト者の群を中心にして始められて行つた。勝山は落合から未だ奥に入った中国山脈の山あいの小さな町であつた。明治二十六年同地方の信者長谷川直吉、高田集蔵、小松鉄一郎等の後援により高梁より神崎竹代を招いて秀英学舎という小さな女子教育の機関を設けた。勝山教会の長老高井慎一郎氏は秀英学舎についてその様に記している。

「其の後、落合教会員であつた長谷川兄姉が勝山に移住せられたものと、明治二十六年に高梁町から神崎竹代がお越しになつて

秀英学舎を設立して女子教育を始められました。此秀英学舎はもとより基督教主義の学校と申す訳ではなかったのですが、併し設立者神崎姉の信仰の感化は余程深いものがあつたようであります。私の前の家内は此の秀英学舎を出たものでありましたから、当時の写真が残つて居りますが、それによると、其卒業生の大部分は基督教の信徒となり、又は信徒の家庭に縁付いて居るように思われます。現に同志社女子専門学校の教授を勤めていられます杉原姉を始め其写真に写つている人一〇人計りの卒業生中私の知つて居るだけでも七人迄が皆信仰を持つようになつたことは見逃すことの出来ぬ大なる事実であります。」

神崎女史は山間のさびしさの中に幾度か高梁に帰ろうかという氣持を抑え、八年の間勝山に留つて教育と伝道に励んだ、自分がいなくなつたら誰がこの娘さん達の教育をするであろうか」と思い自らを励まし、この小さな隠れたる女子教育の任に當つたのであつた。やや時代が後のことになるが、津山に於てもキリスト者の間に女子教育の爲の努力のなされて居ることをわれわれは知ることが出来るのである。即ち明治三十年のはじめごろより津山教会員竹内文を中心に竹内女学校なるものがあつた。竹内の家は早くより一家をあげて入信津山教会の柱石をなして居た。竹内文の父廉、叔母信は何れも津山教会の最初の受洗者であり祖父や母も後に入信し、彼女自身も神戸女学院に在学中に明治十九年一月三日に受洗して居る。明治十八年同志社の神学生として来援し、卒業後津山に伝道師として赴任した馬場種太郎と結婚したが、惜しくも病の爲に馬場は明治二十九年十月永眠した。彼女は長男、俊彦(當時六才) 次男、謙(當時

四才)の二人の遺児を伴ひ津山に帰り自宅に竹内女学校の看板をかかげ女子教育に専念した。家事裁縫は母の信が教え、英語や国語などはは学科は文が担当した。

竹内文を尊敬していた詩人薄田泣菫は津山に竹内文を訪ねたときの印象を次の様に綴つて居る。

「姉がこの十年の苦衷を知りぬいて居る自分は、この場合慰むべき言葉をだに持たない。斯くしても幸福とあきらめなければならぬのであろうか。姉は義しきことのために苦しめられて居る。夫と死別れて以来二人の子供を育てあげる傍、宗教の伝道と女子の教養にあらん限りの力を揮つて己の主義の下に勇ましく世と戦つて居るのである。地の榮華と名利とは姉の前には殆んど路傍の名無し草の少きにだに若かないのを見ては、自分の性を忘れて殆んどげだかいままでの其の心を祝福せざるを得ぬ。が本来、涙もろいその性質は、面にこそ現わさなければ、事に触れては如何程にか世の路の険しいにあぐんだことであらう。『祈るべき神と場所とを持つて居るものは尚しも幸福です』と姉はしづかにうなづくのである。」

竹内文は心に煩いの出来たときは唯独り城趾に登つて祈るのが常であつた。キリスト教の信仰を支柱とし、内外の困難とたたかいつつも、尚女子教育の爲に尽力することに自己の使命とよろこびを見出して居る姿を知ることが出来る。この世から遁れて神に祈るといつた逃避的な宗教性ではなく、静かに祈ることによって、困難の多いこの世におけるつとめに新らしいちからをうけて當ることが出来る様な積極的な祈り行動的な信仰がそこには支柱となつて居るのである。

右にあげた女子教育の外にもキリスト者によって創立され営まれた学校もあった。岡山に明治二十一年九月より男子の爲の岡山英語学校が創設され、備陽学院といった。之は二年制の学校で大体三十名から五十名位の生徒数を有し、外人三名日本人四名が教師陣により、明治二十二年には当時の教会の牧師、安部磯雄が校長を勤めていた。

これらの初期の岡山のキリスト者達がおこした教育機関はいづれも小規模のものであったが、外国から資金を導入して経営をはかるいわゆるミッション・スクールと異り、自分達の犠牲によって営まれて行った日本人の学校であった。そしてそれに当った人々は洗礼を受けて間もない少数のキリスト者達であった。彼らにとつて主に従うということは、直ちに隣人に仕えるという応答を意味していた様に思われる。特に當時に於いては殆どかえりみられなかつた女子に対する教育に対して身を挺して當った努力は注目すべきものがあった。

しかしこれらの諸学校の設立後内外の情勢から幾多の困難に遭遇し、或るものは県立に移管し、或るものは廃校するに至つた。国家主義的な潮流が岡山の地方にも漸く押しよせ宗教と教育についての論戦や教育勅語による教育方針の規定がなされ、逆流に抗し、しかも弱い経済的基盤の上に立つて、独自のキリスト教教育を地方に於いて遂行することは容易なことではなかつた。

(1) 明治十年笠岡在住の陶器商 柚木吉郎は神戸のアッキンソンより初めてキリスト教の説教をきき感動し、十年夏吉田作弥が十

一年不破唯次郎が夫々夏期伝道に従事す。之よりさき柚木は七一雜報に横浜の禁酒会の規則の出ているのをみて同志と相談し禁酒会を結成した。七一雜報明治十二年十二月二十六日号・明治十一年三月八日号。其の後明治十二年春アッキンソンは再度訪問をなし、福山と合同して神学生を迎へよう斡旋をなし (The Missionary Herald, Sept. 1879, p. 337) 明治十五年岡山教会員丸毛真応が一年の約束で笠岡で滞在伝道をなす。之が定期集會のはじめである。(The Missionary Herald, May 1882, p. 188 及び岡山教会小史頁八)

(2) 高梁基督教会五十年史、四頁、

(3) The Missionary Herald, May 1889, pp. 391—395. 尚ケリ 1の落合訪問の報告によると明治五年ころ医学を学びに神戸に赴いた青年がグリーンのもとでキリスト教を学び落合に帰りキリスト教の集會を開く様になつたことが記されている。

(4) 津山基督教会記録明治二十三年五月十一日起には津山教会の略史が記されている。尚明治二十七年に岡山—津山間の鉄道がはじめて開通するまでは交通は吉井川の便により西大寺より船によつてなされていた。大阪で運送業をしていた森本惣吉はキリスト教に触れ、同志の梶村平五郎、福井浪二とはかつて運送業を営み、明辰社と称えた。彼の弟森本延昇は特に熱心な信仰をもつていた。彼の墓が今日でも津山市愛染寺にあり「義人は信仰によつて生くべし」と刻まれている。之は恐らく津山における新教徒の墓で最も古いものと言われている。之は津山基督教図書館長森本慶吉氏に聞いた。

(5) The Missionary Herald, Vol. LXXVII No. 1 January, 18

83, p. 95 岡山教会の最初の受洗、転入会者三十三名の名前は岡山教会小史五頁に記されている。

(6) 石黒涵一郎は弁護士であり後に代議士となり政友会総務となる。

(7) 中山寛は県会議員から岡山市長になった自由党生えぬきの弁護士で、岡山禁酒会の創立者。

(8) 安部磯雄「社会主義者となるまで」一四一—一四二頁

(9) 同右書一四三—一四四頁

(10) 石川豊次郎、柳井重宣、家本平左衛門については伊吹岩五郎「備北文化と基督教」第一輯 六三—六八頁参照

(11) 同右書 五八—六〇頁

赤木いしについては警醒社 信仰三十年 基督者列伝三頁

(12) 留岡幸助「ベレー師と私の発心」大久保利武編「日本に於けるベレー翁」一五六頁

(13) 天城教会については、工藤英一「明治初期プロテスタント伝道史の社会的考察」—天城教会を中心として—明治学院論叢第三十三号 九一—一〇五頁に学ぶところが少くなかった。

(14) 堀俊造は弘化四年十二月二十二日生れ、神戸に医学を学びキリスト教に接し明治十六年落合に帰り開業、禁酒を契機として聖書を学び入信し一家をあげてキリスト教となる。後に同志社校医となり七十有餘才にて京都で永眠。(落合町史二六三—二六四頁) 勝山教会の柱石となった長谷川直吉は堀宅にて修業に励みその感化によつてキリスト者となる。勝山基督教教会報第八号長谷川直吉 兄記念号、三頁

(15) 小松鉄一郎 慶応三年生、同志社を卒業明治十九年三月十日

落合教会にて古木牧師より受洗、明治四十五年から大正五年まで真庭郡川東村の村長をつとめ、温厚徳実にて郷党の人々間に信望があった。森本慶三編「小松鉄一郎書簡集」がある。

(16) 小松鉄一郎氏が水島三郎氏に宛てられし書簡で水島氏蔵

(16) たとえば初期の記録の中には宣教師の携えて行ったオルガンが非常に珍らしくその音にひかれて教会の門をくぐった者もあつた。

(17) 七一雑報 明治十四年一月二十一日号

(18) 内藤正中「山陽自由党の組織過程」経済学論叢第七十八巻第一号八四—八五頁

(19) 倉敷の領地が返還されたのが明治元年五月一日であるのに備前藩は明治二年六月十七日である。

(20) 内藤正中 前出論文八〇頁

(21) 好事雑報第二号(明治十一年七月十日)によると板谷弥平が「唐柿なるものを培養せり、然れども未だ其食法を知らず願くは貴社其法を教示玉はば幸甚」とたずねおり之に対し石阪堅壮が図入りでそれを説明し漢名では蕃柿、一名六月柿、蘭名アツプル英名トマトとよびその食法を記している。又、第三号(明治十一年七月二十四日)には木村和吉がシヤチホコの子と云う奇魚を得たりと図入で鑑定を求めている。

(22) 七一雑報 明治十四年一月二十一日号及倉敷基督教教会略史三頁

(23) 石阪の娘は中村しづ

(24) 倉敷基督教教会略史、三頁

(25) 「備前上道郡西大寺村伝道の景況……近頃此地に於て一時腕

を張たる自衛社と号する国会願望者の一民党ありて其説に曰く耶蘇教は我國不用のものにて我社中の取ざる所なり、又曰く我國今日は形勢に方り神だの罪だのと論ずる場合にあらず、今や日本の急務なる大危険ありて之を防ぐには国会開設に熱心奮発同意せざんば非ずなどて防ぐる者あり。然も此地に伝道せし始めは六十名程の聴衆あり、終に減じて七八名に至りしが、此等の人は皆聖書につきて勉強し日・水には欠なく集り其内医師松崎某は布教に尽力の志あり又自衛社党の中にも近頃に至りては耶蘇教の説くところは理の正当なりと悟し向も有よしなれば追々近村には伝道の都合を得ならんとて三宅京次郎氏より報知の略」(七一雜報明治十四年二月十八日号)

(26) Second Annual Report of Okayama Station, May 1880.

(27) ヨハネ伝一七章二十一節

(28) 七一雜報創刊は明治八年十二月二十七日で、はじめ約一千二百部出ていた。明治十二年岡山では市長が県令のすすめもあって製本して公立学校にそなえをせていた。Second Annual Report of Okayama Station, 1880

(29) 七一雜報 明治八年十二月二十七日号

(30) 留岡幸助古稀記念集 一二頁

(31) 彼は少年時代口論から土族の子供と喧嘩をし土族の子供は腰に帯していた木刀で彼ひどく撲った、町人の子供である彼は素腰であったので散々に撲られ、憤慨して、撲った子供の右手をひきよせその手食に喰ひついた。すると翌日父が土族屋敷に呼び出され「昨日お前の息子が喧嘩をして坊の手首に喰ひ付いたので、此通り歯がたが付いている」といわれ今日限り出入を差留められ

た。得意先を失って立腹して父に留岡はひどく撲ぐられ、土族と町人との間の差別を子供作らに覚えたいことである。

留岡の家は白米商であった(古稀記念集八頁―十一頁)彼は入信の際にも「聖書や類書には仮名が附いているので大へん分り易い」ことを挙げている(同上書一四頁)

(32) 七一雜報 明治十一年六月七日号

(33) 七一雜報 明治十一年九月六日号、九月二十七日号参照

(34) Second Annual Report of Okayama Station, 1880

(35) 七一雜報 明治十二年四月二十五日号

(36) 岡山基督教会五十年小史 二頁

(37) 安部磯雄「社会主義者となるまで」一四四頁

(38) 同上書 一五〇頁

(39) A Pioneer Doctor in Japan (更井美子訳)

(40) The Missionary Herald, LXXVII No. 1, Jan. 1881 p. 57

(41) 七一雜報 明治十三年十二月二十四日号

The Missionary Herald, LXXVII No. 1, Jan. 1881, p. 57.

(42) 「安息日を守るべき事」七一雜報 明十年一月十九日

(43) 高粱にて、福西氏談

(44) 「信仰三十年基督者列伝」二五八頁、又津山、森本氏にも石氏のもとに伺った。彼は入信の決意をあらわし「我が罪をわが知り得たる其日こそ

人のまごとはじめなりけり」

と詠んでいる。

(45) 落合町史 二六三頁

(46) 禁酒に関する記事を明治十年の七一雜報にみるに次の様なも

のがある。

「禁酒の事」明治十年六月二十二日号

「欲に克つて酒をやめる法」明治十年七月十三日号

「禁酒令の広告」明治十年九月七日及十四日号

「禁酒会をたつる趣旨」明治十年九月二十一日号

「禁酒会の規則」明治十年九月二十一日号

「盃を碎きて飲酒を廃る話」明治十年十二月二十一日号

(47) 七一雑報、明治十一年三月八日号

(48) 隅谷三喜男氏の「近代日本とキリスト教」によると上田に同様の例を見出すことが出来る。

(49) 「財団法人岡山禁酒会館の過去と現在」参照

(50) 信仰三十年基督者列伝 二二六頁

(51) 倉敷基督教会略史 一九頁

(52) 明治十六年小梅は影山英子と園濟寺で「谷間の桜」という題

で、女子解放を叫んでいる。(岡山県社教新聞第五号) 尚その記事については岡長平氏より伺った。

(53) 天城組合基督教会創立五十年史 十一頁

(54) 倉敷にて当代の林源十郎氏よりきく

(55) 津山基督教会記録明治二十四年六月七日

(56) 同右 七月五日

(57) 同右 七月十二日

尚韻文を参考までに記すと

追々暑氣相加候処 奉賀候

然ハ貴姉結婚手續上当教会規則ニ触レ候廉有之過日協議会を開キ

爾後二回丈々晩餐之聖典に陪席する事を得ずと決し申候。

右御氣之毒なから教会ハ正義ト秩序を保たん事を欲するか故前条
処置仕候事ニ付喜んで御受ケ被成下度候処々不備

津山基督教会

明治二十四年七月三十日

辻志磨 殿

執事 ㊦

(58) 津山基督教会記録 明治二十五年一月三日

(59) 教会の社会学的性格を E. Treitsch はその著 Die Sozial-

lehren der christlichen Kirchen und Gruppen, 1912 に於て

なし基督教史の流れの中こそその社会的形態として「教会」「分派」

及び「神秘主義」の三つの類型を挙げている。(S. 358ff, 794ff.)

M・ウェーバーは資本主義の精神に緊張を与えたものとして分派

の強調した高度の道義性と強い節制のあったことを指摘してら

る。(Die Protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalis-

mus, Gesamte Aufsätze zur Religionssoziologie, Vol. I, pp. 23

5, 1925) 「教会」「分派」の社会学的分析を Gustav Richard

Niebuhr, The Social Sources of Denominationalism, 1929,

Liston Pope, Millhands and Preachers, 1942, を参照せられたる。

「分派」の演じて来た社会的貢献はあながち否定的なものとは言

えない。ウェーバーが指摘している様に、この世と妥協しない強い

正義感、高度の道義性の強調、或いは社会悪に対する予言者の批

判等々少数者である「分派」の演じた役割は高く評價されるべきで

ある。他ホープの示唆している様にこの世に対する排他的な態度

や、組織的活動の欠如は「分派」をして社会変革に於て消極的

な立場に追いやられたことをも認めなくてはならない。

(26) Second Annual Report of Okayama Station, 1880.

- (61) 同右書
- (62) 留岡幸助古稀記念集
- (63) 若林元益『ペリー氏の思い出を辿りて』日本に於けるペリー翁 一七八頁。
- (64) 『岡山博愛会沿革誌』「アダム女史一夕話」参照
- (65) First Annual Report of Okayama Station, 1879
- (66) 同上書
- (67) 上代淑『第五十六回創立記念日に』上代淑先生訓話集七二頁
- (68) 「創立五十周年史」及び「岡山県教育史」、中、四六七頁
- (69) 上代淑『創立時の精神に立ちかえれ』上代淑先生訓話集五六頁
- (70) 上代淑『第二里を行く人とならん』同右書 三八頁
- (71) 後援者として、柴原宗助、柳井重宣、後藤英江、赤木蘇平、小林尚一郎、清水質等がある。「吾校の歴史」二―三頁及岡山県教育史中、四六五頁
- (72) 勝山教会月報、昭和一〇年一月二八日 七―八頁。その他前神戸女学院長島中博氏夫人も秀英学会の卒業生である。尚神崎竹代は倉敷の医師の妻であったが、主人を亡くし高梁に移り、たまたま山室軍平の説教をききキリスト者となった。(之は倉敷教会の林源十郎氏より伺った)。尚笠岡教会の記録によると神崎は明治三十六年二月八日落合教会より笠岡教会に転会している。
- (73) 勝山教会月報一号
- (74) 竹内文の祖父久在は津山藩の下臣で国学の才あり詩歌をよくし、又竹内流の柔やわらといわ棒術を会得していた。彼は明治二十三年六月八日に受洗し、明治四十一年九十四才の高齢で永眠してい

る。彼の妻は幸と言ひ大正元年に永眠している。その娘潮の夫で岡山藩浦上家から養子に來たのが廉であり彼は明治十九年二月に妹、信と共に受洗している。潮は翌年四月十二日入信している。竹内文は明治元年生れ廉の一人娘で、神戸女学院に学び明治十九年一月三日に神戸女学院で受洗した。

(75) 松村みどり「薄田泣董」、岡山春秋 一九五九年一月号

(76) 明治三十六津山に県立女学校が創立されると、竹内文は学校を閉じて上京した。彼女は、大正十一年十二月十三日に永眠した。

(77) A Chapter of Mission History in Modern Japan, 1869—1895, p. 103—5

(78) これらの諸学校が衰微して行つた過程については又稿を改めて記述する機会をもちたいと思う。

六 あとがき

われわれは岡山県における初期のプロテスタント教会の形成されて行つた過程を辿り乍ら初代の教会の性格について検討して來た。自由民権運動の隆盛期から欧化主義の時代を背景として、アメリカン・ボードの宣教師達を中心に、岡山地方に福音の種が播かれて行つた。宣教師達は日本の教会の独立を尊重し、又日本のキリスト者達は日本の伝道に主体性をもって當る精神を強く持つていた。

初期の教会を形成した人々は種々なる階層から成つていたが、概ね、伝統的な思想や生き方に不満を覚え、新しい道を求めて人々や比較的進歩的な人々が少なくなかった。必ずしも集つたすべてのものが教養のあるものとは限られなかったが、教会の熱心な教育

的関心に啓発され、インテリ中層と昇化作用をなして行った。又彼らを支えていた倫理は内世俗的な禁欲を強調するピュリタンニズムの色彩を強くもっていた。それは社会の変革期に於て新らしい人間の生き方を求めていた人々に方向を与え、この世の中にありつつ、この世との緊張の中に生きる、キリスト者の一つのスタイルを形成して行った。しかし、宗教改革を経て、絶対者に対する自由な応答としてとられた生き方が、そのまま封建的なわが国の土壌に移入され、儒教的な誠命に対する態度と結合して本来の自由な生きた応答としての性格は失われ、むしろ固定化された、律法的な拘束となりゆく危険性を内包していた。明治期に於いて、新しい人間の生き方を提示したピュリタンニズムが後の岡山県の教会においては、どう受けつがれ、又社会に対してはいかなる役割りを果たしたかは、更らに分析を必要とする重大な課題である。

初期の岡山県の教会の伝道活動には、宣教活動の諸要素が全体として取り上げられていた。伝道が単に口頭による説教に止まらず、全人格的な証として、社会奉仕、教育、教会の交り、そして説教の四つの観点から総合的に取りあげられていたことは注目に値する。最近のエキユメニカル運動の中で教会の伝道は、宣教 (kerygma)、交り (koinonia)、奉仕 (diakonia)、平信教育 (didache) を通じて全体としてなされるべきことが主張されているが、岡山県の初期の教会には、この四つが一体として組み合されていたことをわれわれは知ることが出来ると思ふ。

教会の交りにみられた、平民主義、医療や社会事業を通してなされた奉仕のわざ、そして開拓的な女子教育の分野における働き等が、口述の説教と並行してなされ、それらの行動自体が彼らの内に

ある望みについての有弁なる証となった場合が少くなかった。後の岡山県の諸教会が宣教の教会に必要な諸要素を如何に保持して行ったか、それらの要素が分離して行くことなく全体として把握されて行ったかは、大切な課題であると思ふ。

これらの広範な教会の活動を推進して行ったキリスト者の群はごく少数の人達であった。彼らの多くは受洗を受けて間もない人々であり、キリスト教を学ぶことにより任せ、他者に仕えることによつて福音を体得していた。一人々々の平信徒が夫々の仕事や賜物を通して神に直接に仕える祭司であるといった万人祭司の精神の反映をわれわれは初期のキリスト者の中に見ることが出来ると思ふ。

岡山県の教会は明治二十三年ごろより何れもその教勢が停滞し、或るものは甚しく衰微の過程を辿つてゆく。勿論これは先述の宗教的集団の内面的な問題にもよるが、それをめぐる社会的な状況の推移のもたらした影響にも負うところが少くない。これらの過程については更らに綿密な検討が必要であり、稿を改めて考えたいと思ふ。

(1) Theodore O. Wedel, *Evangelism's Three Fold Witness*, Kerygma, Koinonia, Diakonia, *Ecumenical Review*, April, 1967.

岡山県における初期の教会の形成過程年表

〔自明治八年—至三十年〕

Table with 15 columns representing years from 1875 to 1897 and 15 rows representing different church categories: 岡山教会, 高梁教会, 笠岡教会, 天城教会, 善合教会, 津山教会, 全国の教勢, and 社会・文化. Each cell contains detailed text about church activities, membership, and events for that year.